

「Surgical Diseases of the Pancreas」

Edited by John M. Howard

George L. Jordan, Jr.

Howard A. Reber

京都大学医学部助教授(外科学)

鈴木 敬

確か往年の白黒映画の名作“ビルマの堅琴”が、同一監督によりキャストを一新して再製作され、前作以上の深い感動と賞賛を全土に巻き起こしたのはまだ記憶に新しい。かかることは映画演劇の世界では珍しいことではないが、この場合、関係者をして再製作へとかりたてたものは、旧作に対する根強い憧憬であったに違いない。

同じことが自然科学専門書に発現してもなんら不思議ではない。ましてそれが卓越した名著であればなおさらのことである。

少なくとも過去“膵臓”に携わった中堅以上の外科医であれば、1960年にJM HowardとGL Jordan Jr両博士により編集された「Surgical Diseases of the Pancreas」を知らない人はまれであろう。当時は、かかる膵臓外科分野の名著としてはCattell博士のものなど二、三を数えるにとどまり、それだけに本書を座右に日夜研鑽を積まれた方々もあまたに及んだはずである。

いま、久しぶりにこの旧著を手にしてみた。当時の分担執筆者はAO Whipple博士ら11人で、内容は歴史、解剖などから始まり25項目にまとめられている。

ところが、このたび前記

Howard, Jordan JrにHA Reber博士が加わって編者となり、Lea & Febiger社より同書の改訂版が同名のもとに上梓された。本改訂版の巻頭においてJ Rhoads博士がいみじくも述べている。“本書が最初に発刊された1960年以後現在までに累積された膵臓外科の知見は、キリスト生誕以後1960年までに記録されたそれに比べると、ゆうに10倍は越えよう”と、それを裏づけるごとく、今回の改訂版の分担執筆者は60～70名にも増え、そして項目も概論から始まり診断をへて各疾患に及び、更にホルモン、外傷、移植などへと膵臓外科領域を網羅した67の章に広くわたっている。

印象的なことは、これら分担執筆者が世界各国に及んでいることである。例えば肺炎のところをみると、“The international experience”という項目が設けられ、そこにはアメリカ、イギリス、ヨーロッパ大陸、インド、日本を含む東洋、熱帯地区などからの各執筆者が各自の独立した章を受け持って、本疾患の地域的特異性を記述している。また、そのplanned operationの部分もThe American experienceとかThe continental experienceとかに章が分かれている。膵疾患の成因、頻度、病

態、治療方針、手術成績などが目下甚だlocal colorに富んでいるだけに、かかるglobalな構成は斬新である。

嬉しいことに、各国の一流執筆者に伍して、わが国のAriyama J, Satake K, Tomita Tなど日ごろより敬愛してやまない各博士も筆を執り、大いに気を吐いておられるのも見事である。

手術の図で、二、三鮮明さを欠くものがあるものの、全般的には要領よく図表を使って読みやすく構成されており、引用文献も豊富であって、本書があれば世界の膵臓病学の過去、現在、未来への流れが自ずと把握できるような仕組みになっている。

膵臓外科に今手を染めている医師は言うに及ばず、内科、放射線科、核医学科、臨床検査科、更には病理や基礎医学に身を置く人々にも、そしてsenior doctorのみならず研修医、学生、コメディカルの人々にも広く推奨できる良書であるとの感想を持った。

往年の旧名著を上回る新名著がまた1つ、時代の要請に応じて改訂出版されたことを心から喜びたい。

958 pp. with figs. 1987 B 5 判

定価 ¥43,500

Lea & Febiger, Philadelphia

日本総代理店 医学書院洋書部